

The Gallery Voice NO.7

発行/画廊沖繩〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-6760/ART COMMUNICATION PAPER/ 1990.6.1

ちょうちん批評は、もうイヤ

島尻 雅彦

“絵画鑑賞”については、ずいぶん前から意識的に距離をおいてきたつもりでいる。というのはプロ・アマ問わず、「鑑賞力」ということについて、煮え切らない何かが自分の中でずーっとくすぶり続けていたからである。

ところがここ数年、新聞等の芸術月評や展示会の批評欄をよく読むようになった。どの展示会に行くかどうかを決める情報を得るためと、自分なりの“絵画鑑賞”をするためである。

しかし、沖縄の美術評論、批評はどれもこれも誉めるだけ。つまらない。批評なのだから知り合いや友人へのおべっかばかりじゃしようがない。新聞という公器を二人のラブコールの道具にするつもりかと一人興奮している。

まあ、Aさんの今度の展示会の評を誰にお願いするかは、Aさんが自分の友人知人を指名するか、あるいは記者がAさん関係の人に依頼するんだろう。下手な記事を書いたら“仲良しクラブ”から破門されかねない特殊沖縄社会である。当然ほめちぎることに終始する。

たまには勇気あるハグレものが、チクリチクリと批評欄で刺すと、何だってあんなひどい事を書くのとばかり投書が舞いこんだりするから始末におえない。

もともと芸術という分野は、人の「好み」で評価が決定されることが多分にあるから、世の人間の数だけひとつの絵に対する評価も分かれていいはずである。

だから、他人がよい評価を下しているものに対し、俺は嫌いだとソッポを向いてもお前の感覚はおかしいとケンカを売ってもいいわけで、わかってくれる人がわかればいい…という半ば駆け落ち女の



心境でない芸術を続けることは困難なのかもしれない。

そういう意味では、はたして芸術に対する公の批評というものがどこまで価値があるのかという疑問も湧いてくる。つきつめて言えば公の批評ほど真剣勝負でないと、読む側はたまったものではないのである。

まあしかし、人間だから感動したこと

を言いたい気持もあるだろうし、表現したい衝動にかられることもあるだろう。それがすなわち芸術の生まれる源泉でもあるわけだから…。

だったら、美術批評は誉める人だけに原稿を依頼しないで、たまには感覚の違う人にも書かせたらどうだと言いたい。

どこそこで展示会が行なわれていますよぐらいなら、単なる催し物案内で用が足りるはずだ。

最近の美術批評を読んでいると、作品よりむしろ作者の人間性やその行動への共感が先走り、(むろん、それは作品の延長線上にあることも否めないが) ついでに作品までよく見えてしまうみたいところが多く感じられ、天皇発言ではないが遺憾に思う(この言葉は韓国の抗議をまつまでもなく全くもって責任の所在がはっきりしないアイマイな日本語である)。

もっとも作品の良し悪しよりも、作者への好感度が作品の人気を高めてしまうというのが、最近の傾向なのである。作家の権名誠がその典型であろう。それ故に個人が作品を購入することは、かまわないのである。自分の金で買い、自分で楽しむのだから。

しかし、新聞の批評は作家へのちょうちん記事じゃないんだから、もっとメリハリをつけて、ピシバシやってほしいと思う。

仲良しクラブっていうのは結局、ぬるま湯と少しも変わらないのである。あまり作家の質を高めるとは思えないし、ましてや沖縄の美術界にとっても、いいはずはないのである。

(広告代理店勤務・しまじり まさひこ)

* 額縁の専門店 *

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367



沖縄で生まれた郷土の信販会社

沖繩信販

〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(0988)51-1123 他

アートライフは、OCクレジットで。

目醒めよ、眠れる“やさしき文化たち”

— 共に喜び、共に悲しむ —

VOICE INTERVIEW③

■ 画家・伊江隆人



“墨”という、まさに東洋的武器を通して、独自のアート世界に斬り込む異才・伊江隆人氏。沖縄文化の底に眠る「やさしさ」を目醒めさせるべく、日夜精力的な活動を続けている。人間の内に潜む「愛」を根源的表現としてアートを模索している氏に、自由奔放に語ってもらった。

つもギリギリの線でやっているんです。NYで15年、アート業をやっている日本の友人は年に2、3回ぐらいのグループ展や、アルバイトにデザインの仕事をしたりしています。彼は16年目にしてニューヨークの画廊でプロとして認められ、個展をするまでになったのです。とにかくいつも眼が光っているんです。あー、いい環境だなんて感じました。彼が言う

GV こんにちは。最近の伊江さんは、すごく頑張っている感じがしますね。特に、この2、3年、NYでのパフォーマンスや沖縄ジャンジャンでの音を絡めての仕事など、精力的な活動をこなしています。沖縄にもアーティストはたくさんいますが、アートに向かって24時間働いている人というのは、少ないように思えます。その中で伊江さんが、創作三昧をしているというのはファンとして、たいへんうれしいと思います。最初に、現在の創作現場の状況をお聞きしたいんですけど？失礼な聞き方も知れませんが、実際アート一本で暮らしは、成り立っているのでしょうか。

伊江 正直言って、生活は苦しいですね。3年ぐらい前から、なんとか生活が出来るようになってきましたが…。うちの律子が書道の講師をしながら協力してくれていますので、自由にやっています。僕は创作者であるし、創作することが生きることですから仕事を別にもってアーティストになるというのは、僕の中で非常に難しいことなんです。

GV どうでしょう？今、沖縄の作家たちを取り巻く環境というのは、創作活動をしていく上でやりづらい部分はないのでしょうか？画廊の状況やマスコミの取り扱い方、或いは社会的なカネ余り現象も、そういう範疇に入るのかも知れませんが。

伊江 僕にとっては、やりづらいところが逆にプラスになることがあるんです。NYに行った時、向こうの人の創作に向かう眼がギンギラギンに光っていて、い



伊江 隆人氏

には、日本でやっている作家は甘いよと言うんですね。もちろん、僕は反論しました。僕にもギンギンに惹かれるものがあるって、それなりにやっているという自負がありましたから…。

沖縄のアート状況で特に感じる事は、作家とギャラリーとの関係やマスコミの取り上げ方が、プロもアマもまるで同じという感じがします。いきなりスターだという感じで、ウン十万で売れる人が出てきたりする。画家と称する人が1年から2、3年の内に1回の個展を喫茶店で催したりするのは、自分の芸術活動のくいぶちの為ならいい事だと思いますが、やはりちゃんとした設備の整ったギャラリーでやってもらいたいですね。そういうのは、余ったエネルギーでやってもらいたいものです。沖縄に“チャンブルー”というのがあるけど、アート状況における

プロとアマの世界まで“チャンブルー”になっちゃいけないと思います。自分の本業と別の世界で物を創っていく作家の現在を乗り越える必要があると思います。

僕は書の世界から現代アートの世界に入ってパフォーマンスをしているわけだけど、最近、墨と沖縄の素材の関連性が見えてきて、いろんな広がりを感じ始めてきました。まあ、そのことで村八分の存在にされたりもしますけどね(笑)。しかし無視される、それが僕のアートのエクスになるんです。おだてられたり、誉められたりするよりかえって興奮するわけです。僕の目標は、NYで個展をすること。支えてくれる大事な友人たちがいてくれるから、目標に向かってギンギンに輝けるんです。例えばNYにいる友人に俺は沖縄といういい環境にいるんだぞって伝えたら、彼もまた喜んでくれました。とにかく、そういう仲間たちに頼ってもらうためにもNYでの自分の個展が早く実現するよう頑張りたいと思います。

GV 食欲に作品に取り組んでいる中で作品が出ていくというか、売れていく状況というのは、どうでしょう。

伊江 作品をどんどん創ったら、もちろんたまっていくんだけど、売れていかないという厳しさはあるんです。

GV 創作している人が自分の人生と存在を賭けて、作品を展示するにはやはりちゃんとした市民ギャラリーのような所でじっくり観てもらった方がいいですね。しかし、最近大学を出たばかりの若い作家がギャラリーで値段をつけてやっていたけど、とても残念に思いました。もう少し、気持を抑えて、本当に創作する意義とか自分の世界を発表してほしい。実際、作品も小振りの域を出なかったように思えます。

伊江 確かに4年間のエネルギーをドーンと発表するのは、必要じゃないかと思いますが、アーティストとしての位置の確認は少なくともほしいですよ。

GV 特に若い作家たちは現実的にスケ

有限会社
画材専門

タナカ

代表取締役 田中興八

〒900 那覇市牧志2丁目17の6番地 TEL (0988) 61-7410 沖縄通りダイナ/1向い

おかげさまで、これからも。



琉球石油株式会社

沖縄県那覇市松山2丁目27番1号 ☎(0988) 68-2131

ールダウンしているように思えます。

伊江 時代とか世代とかの問題では、決して片付けたくないことですね。そういうことは、アートにとって淋しいことです。確かに個展をするのは、素晴らしいことだけでもっと自分を見つめなくっちゃいけないですね。

GV 先程、沖縄の素材の話が出ましたが、伊江さんのテーマとの関わりをもう少し聞かせてください。

伊江 沖縄に住んでいると腹いっぱいいろんな事があるんです(笑)。エイサーとか糸満ハーレーとか、村芝居、感動するものでいっぱいです。実に人間のやさしさを感じるんですね。

GV 沖縄の文化、やさしさというのは伊江さんの表現のねらいとつながるものがあるんですか？

伊江 確かに、ありますね。おじいちゃん、おばあちゃんに教えられることは、とてつもなく大きいものです。共に喜び共に悲しむという、沖縄文化の根源みたいなものを痛切に感じます。そういう文化に触れると自分は、アーティストとして本当に喜び悲しみを表現しているのか、本当に感じているのかって考えさせられますね。正直言って、僕の表現の原点みたいなものかも知れません。

GV 日本の社会というのは近代化してしまうと、地方のアナログ世界を土人の習慣だみたいな考え方をするように思えます。伊江さんの考え方は、それに反発していく感じですね。

伊江 自分たちの文化は素晴らしいという事をみんなに話したいし、表現したいですね。僕はおじいちゃん、おばあちゃんを心の底から賛美しています。それを平面的な表現世界で浮かび上がらせてみたいと思います。

GV 伊江さんの作品を観て、それは充分に感じます。

伊江 もったいぶって聞こえるかも知れませんが、僕のテーマは「愛」なんです。それ以外は、考えられないですね。

GV 沖縄文化の「やさしさ」というものと、伊江さんの「愛」は合体する訳ですね。

伊江 その考え方は、キリストとの出逢いが始まりだったように思えます。僕の中では、一番強烈な「愛」だったわけです。それと、先程から言っているように沖縄の素晴らしい所をみていこう、変な

所は切り捨てていこうという考え方をもっていたということでしょう。とにかく共に喜び共に悲しむ世界を表現していきたいと思っているわけです。すなわち、それが「愛」なんです。

GV 沖縄の共同体意識、たとえばユイマルとか、シーミーとかには積極的に参加しているんですか？ 今、おっしゃったテーマに関わってくると思うんですか？

伊江 僕はクリスチャンなんです。しかし、シーミーなどの沖縄の行事は必ず出るようにしています。祖先を敬う中に、



伊江 隆人「カマキリと牛が光る」

大きな語り聞こえてくるような気がします。親に教えられたことを、いつか子供に教えるんだということを大事にしたいですね。

GV 情報がもの凄い速さで駆けめぐる時代になっています。そういうことは、地域とか民俗とかに関係のない所で流れていることもあると思います。沖縄で生まれ育った美意識、価値観を掘り起こすことで芸術としてちゃんと、たちうちしていけるものなのか、それともそんなに難しく考える必要のないものなのでしょうか？

伊江 僕にとっては難しい時もありますが、可能性は十分あると感じています。フランスやアメリカの美術館を観てきた感じで言うと、向こうの方は油絵の世界なんです。墨という水性的な作品は、実際殆どありません。僕は墨の中で生きてきたことを大変有り難いと思うし、続けられた事に誇りを感じます。沖縄という土壌が、今の自分を育ててくれたと思

うし、そこには表現者にとって最高の自然と厚い人情に裏付けされた素晴らしい素材がいっぱいあります。僕らはそこに生きているのだから…。特に僕の場合墨の中でどっぷりつきり、無限に広がる墨の表情とか表現みたいな所を常に意識しているんで、墨の中に金箔・銀箔はもちろんのこと、芭蕉布、染めた麻布等も素材として使っています。平面の中でいろんな事を語りたし、気持を伝えたいんです。

GV 情報が飛び交う現代アートの世界で、伊江さんを引き付ける墨の魅力というものは一体何なのでしょう。

伊江 墨は瞬間性です。明確に言うと、瞬間の連続で仕事しているわけです。その瞬間に吸収される墨色の微妙な濃淡に東洋の血を感じます。

GV とりかえしのつかない、表現の形なんですね。油絵と墨、水彩の世界というのはヨーロッパ人の考え方と東洋人の考え方を象徴しているように思えます。

伊江 大体、濃淡という捉え方の意味が違います。ですから墨の濃淡の違いを彼らに感じ、味わってもらいたいですね。僕は、そこらへんの入り口から手法を広げて立体版画等も手懸けています。しかし墨の良さを一番引き出してくれるのは中国の宣紙であり、稲の藁で古い時代から作られたものなんです。その紙で版画もやっているのですが、とにかく最高の材質です。かれこれ、30年使用しています。

GV 伊江さんの表現世界は、つまりは東洋にあるんですね。テーマも自分のベースである生活、暮らしの中にあるものなんですか？

伊江 今あること、現在感じていることを表現したいわけです。

GV これからの、仕事については？

伊江 ニューヨークでは自分流に爆発も、しましたけど、6月にはフランスのクロード・ルマンギャラリーで、パリ作家との5人展があります。常に墨とその他の表現素材をつなぎ合わせる事によって、もっと自己表現の世界を広げていきたいですね。

GV 今日は、どうもありがとうございました。なんか、伊江さんのチャンブルパワーに押されっぱなしでした。これからも、頑張ってください。



Kentucky Fried Chicken.

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市宇勢理客556番地 TEL (0988)75-2168

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 **CSCコンピューター学院**

那覇校 900 沖縄県那覇市山下町103-1 電話(0988)59-0746
中郡校 904 沖縄県沖縄市字室川11-1-10 電話(09893)8-1631

絵にまつわる話で、今でも鮮明に記憶に残っていることがある。

私が、確か小学校の5年生か6年生のころだったと思う。いつものように校内写生大会がおこなわれた。当時は絵の題材にふさわしいということとか、壺屋の窯元や城岳公園にでかけるのが常だったが、その日は先生の都合があったのか、学校のすぐ隣の琉球政府（現県庁）構内が選ばれた。殺風景で、何を描けばいいのかひどく迷った記憶がある。

暑い中、さんざん歩き廻って半日ほどを費やしてしまった私と友人2人は、半

この発言で「もしかして、私には才能が…」と膨らみはじめた希望は見事に潰れ、「やはりまぐれだったんだ」という思いが胸を満たした。教師の言葉を、こんなふう

に細部にわたって覚えているなんてよほどそのときのショックというか、失望が大きかったんだと今でも思う。私は何も、教師が私の絵をけなすようなことを言ったのを非難したわけではない。ただ、「わからん」と簡単に言っ

てのけた教師の態度に、なぜかひどく恥ずかしいものを感じたのだ。

「わからん」とはどういうことか。ある

思うに、私たちは知識を習得したり、理屈を学んだりすることは習慣的にやってきたが、感性を磨くとか、鍛えることに怠惰な面があるのではないか。

「わからん」と安易に言ってしまうことは、「私は鈍感です」と言っているようで恥ずかしい。最近は特にそう感じるようになった。

感性を磨くためには、美しいもの、情熱をもって描かれたもの、名作といわれるものを日常的に見る以外にない。残念なことに、私の家にはごく最近まで、絵と呼べるものが、1点もなかった。幼いころから家に絵を飾るという習慣がなかったということもあるが、それに甘んじたのは高価な絵を買うゆとりがなかったためだ。それに、今のようにギャラリーの数も少なく、絵に接するチャンスと言えは「沖展」くらいしか記憶にない。

絵を愉しむには、ある種の精神的な成長というか、経験を積んだ感動のようなものが要すると思う。そういう意味で、自分の成長にともなって、見る経験を積める場があることは恵まれていると思う。

数年前、沖縄の伝統工芸に興味をもって本や資料を調べていた時期がある。そのとき、浦添で「琉球漆器の美展」が開かれた。展示の規模や内容からいって、

それまで行なわれた展示会の中で最高のものだったのではないか。そのとき見た漆器の数々は、私の沖縄の漆器に対するイメージを一新する迫力があつた。それが、今は浦添美術館で常設展示されているのだから、何とも嬉しいというか、素晴らしいことだと思う。そういえば以前テレビで見た田中一村の絵を、那覇市民ギャラリーで実際に目にしたときも、感激ひとしおであつた。

本当なら（という表現もおかしいが）ゴッホやシャガール、マチスなどの絵をもっと身近で見たいと思う。わが家の居間に、アンリ・ルソーの「ヒヨウに襲われる黒人」などが掛かっていると幸せだけど…と思いつつ、最近、大枚(?)をはたいて、ある県内画家の版面を遂に買いました。さりげなさを装っているけど、心のなかでは密かに「バンザイ」を叫んでいる私なのです。（かつれん しずこ）

アンリ・ルソー

わからない

アンリ・ルソー
勝連 静子



「ヒヨウに襲われる黒人」 アンリ・ルソー

ばヤケになってその辺の道端にしゃがみ込み、「ここいらでなんとか片をつけよう」と、画用紙に向かった。「時間もないことだし、とにかく今日のノルマを果たせば…」という気持で、目の前の風景に取り組んだ記憶がある。

ところがである。翌日学校に行くと、先生が発表したクラス代表の3点のなかに、私の絵が入っているではないか。喜ぶより先に驚きがあった。しかしそれをつかの間。悪友のヤジを気にする私に、追い撃ちをかけるように担任の教師が言った。

「今回は、美術担当の〇〇先生に選んでもらいました。私としては、この2点はいい絵だとわかるんだが、〇〇さん（私のこと）のはどうもよくわからんね。ただ真ん中に道が大きく描かれているだけで、この絵がどうしていいのか、私みたいな素人にはどうもよくわからんが。」

文章を読んで、その意味がわからんということは確かにある、そういう場合は「わからん」という表現がふさわしいだろう。しかし、共通の理解を要しない絵という表現を前にして、「わからん」は妥当ではないのではないか。

幼い時のこの経験は、よっぽど私の心に響くものがあつたと見えて、以後、絵を見るとき安易に「わからん」が言えなくなった。いや「言っちゃいけない」と思うようになった。

抽象画を見るとき、確かに「何だかよくわからない」と感じることもある。しかしそれは、絵を見て何かを感じる、その感動の基盤を共有できていないからだろうと思うことにしている。頭で分かろうとするのではなく、感じる訓練とでもいおうか。



株式会社

日本セメント沖縄地区総代理店
金城キク商会

本社／那覇市西1丁目1番28号/電話(0988)66-1101(代表)
中部支店／沖縄市字松本1102番地/電話(09893)7-0404(代表)

＊専門画材の店＊



CULTURE PLAZA

株式会社

みつや書店

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(0988)63-1650(代)

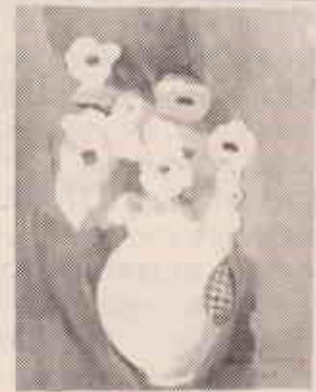
画廊沖繩情報



90-6-1



90-6-2



90-6-3



90-6-4



90-6-5



90-6-6



90-6-7



90-6-8




90-6-9

コード NO	作家名	技法	タイトル	サイズ (cm)	価格
90-6-1	スザンヌ・バルドン	石版	ユトリロの顔(1928年)	18x22	¥ 280,000-
90-6-2	金城明一	水彩	三原にて	25x34	¥ 30,000-
90-6-3	マリローランサン	石版	花	48x62	¥ 260,000-
90-6-4	城間喜宏	石油	マソダラ	F 6号	¥ 240,000-
90-6-5	ルオー	銅板	ミゼレーレ NO.53	40x57.5	¥1,400,000-
90-6-6	屋富祖盛	油彩	恋娘	F 10号	¥ 300,000-
90-6-7	ルノワール	銅板	浴衣のヌード	13x19.5	¥ 135,000-
90-6-8	渡名喜元俊	立体	T E N S H I - V	49x80x6.5	¥ 80,000-
90-6-9	金城満	テンペラ	内か	40x40	¥ 70,000-

1990年6月現在の価格です。

ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店

 **南西空調設備株式会社**

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-7831(代) FAX(0988)34-5348

Adlib 広告制作事務所
アドリヴ

〒901-21 浦添市字勢理客527 ☎0988(77)6535

さわやかな5月のそよ風が吹き抜ける頃、2度目のNY行きのチャンスに恵まれた。さっそくメトロポリタンへ行き、ギリシャ、ローマ時代の遺跡とアフリカの原始芸術を観て廻った。そして近代美術館の彫刻の庭でロダン、ピカソ、セザール等の巨匠の彫刻に囲まれて椅子に座り、じっくりとそれらを感じ取った。ホイットニー美術館では、モビール彫刻家・カルダーの初期の作品、サーカスシリーズの実物と、その記録映画のビデオを観ることが出来た。あの大きな動く彫刻の原点が、このミニチュアの作品から始まったかと思うと、興味が湧き楽しくなった。ところでアメリカには、街中のいたる所に屋外彫刻がある。それらは、フランスと同様に記念像や神話的及び宗教的な彫刻もあるが、巨大な抽象現代彫刻が、よりアメリカらしいのではないだろうか。チェイスマンハッタン銀行前のイサム・ノグチの作品や、リンカーンセンターのヘンリームーアの作品など、周囲の環境とうまく調和しており、迫力があつた。またジョンソンによる等身大の彫刻が、日常的なポーズでNYのあちこちの生活空間に溶けこんでいる。私が歩道で見かけた画家の彫刻などは、キャンパスを覗き込んで、初めて彫刻だと気づくユニークなものだった。一般的な概念では台座なしの彫刻が歩道にあるのは考えられないので騙されてしまうのだ。これは一種のトリックによる意外性をねらったのだろう。彫刻自体は、残念ながらジョージ・シーガル同様、芸術性は感じられなかった。その他、会社のシンボルマークが一つの彫刻的なモニュメントとして存在しているのがあり、ポストモダンの建物によくマッチしていた。このようにNYでは記念碑像彫刻から現代彫刻まで屋外で充分に観賞できる。しかしながら、ここ沖縄でそういう状況がやってくるのは、だいぶ先のように思われる。なぜなら現問題として、屋外彫刻を置く場合には、

絵画を飾るのと違い色々なものとの関わりが出てくるからである。事業家、芸術家（彫刻家）、建築家などの協同体を作り、コミュニケーションを綿密に行なわないと、芸術空間は生まれてこない。現在沖縄でそれをやっている彫刻家は、能勢氏と呉屋氏などで本当に数少ない。確かに、まだ難しい状況ではあるが、いち早く関係者は屋外彫刻に対する認識を持ち、いずれは県内のあちこちに、沖縄の彫刻家の手による屋外彫刻が出来る事を望みたい。先頃、久茂地58号線沿の日本生命ビルの前にモダンな彫刻ができたが、これはいいきっかけになるのではないだろうか。画廊も今後、彫刻の普及に積極的に取り組んで行動していきたいと考えている。（長嶺 豊）

ニューヨーク紀行

飛行機の窓の外を覗くと、そこは満天の星を散りばめた都市ニューヨークの夜景であった。我々は現代アートの発信地



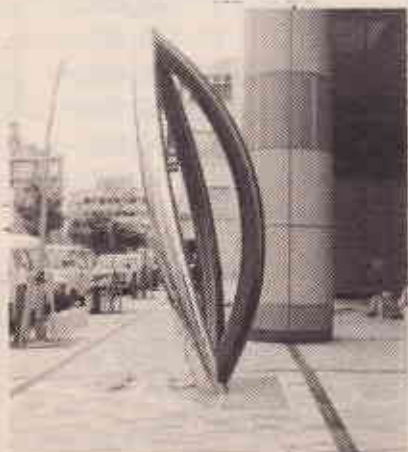
ニューヨークにて

ニューヨークをこの目でとらえ、そこにある何かを感じるためにやって来た。私は画廊に勤めて3年目に突入するが、コンテンポラリーアート（現代絵画）、コンセプトチュアルアート（概念芸術）を今一つ理解できないまま過ごしたように思う。今回の旅で、これらの作品がそれぞれの作者の叫びであったり、社会への定義であったり、新しい未来への志向である事が理屈なしに感じる事ができた。大きな意味のある旅であった。我々は、長嶺を中心に瀬底、玉那覇、私と3泊4日の滞在で美術館廻り、画廊廻り、その他数々のスケジュールをこなした。今回の旅で今も印象に残るのは、やはり美術館である。メトロポリタン美術館、近代美術館、ホイットニー美術館などは特に素晴らしかった。それぞれの美術館の役割がはっきりしており、コンセプトにあった作品を収集している。驚く程の数の作品がわかりやすく展示され、広いスペースに最大級の作品が飾られている。これらの作品の数々の裏には、アメリカという国の文化意識の高さと、文化遺産を踏ま

えた上で、これからの未来の架け橋となる社会を模索しているように思える。次に視点を現代絵画、コンテンポラリーアートへと移してみると、まさにニューヨークそのものが現代作品を生み出しているように思える。ニューヨークは常に明と暗がはっきりしている。物質文明と消費社会、デジタルにビジュアル化された光と映像、このように高層化されたビル谷間で、いろんな人種が生活している。明るい通りには娯楽にいそむる人々。暗い通りには昼間お金をせびるホームレスの人々。明と暗が一つの社会に存在しているのである。その社会の中で、アーティスト達も生活し、呼吸をしている。彼らはギリギリの生活の中で新しい見方や生き方、考え方を提示し、社会に訴えている。彼らの作品は、実に多種多様に方向が分かれている。彼らの仕上げた作品は優れたものから画廊へ展示され、画廊と作家は一緒になって社会にアプローチするのである。ニューヨーク社会は彼らのコンセプトに共感し、作家は作品を社会に還元しながら美意識の探求を続けているように思えた。しかし大都市ニューヨークで感じた現象は、この一地方の沖縄社会と将来無縁ではないように思われる。これからの沖縄はさらに情報化されビジュアル化されていくはずである。人々の生活は消費物質に埋もれながら、生きていかなければならない。街がどんどん都市化される中で、アーティスト達もまた呼吸し表現していく。どのような型で表現するかはわからないが、ウチナンチュであるアーティストも我々も、沖縄独自の文化と歴史を理解した上で新しい美意識を開拓し、社会にとり入れていかなければならないと思う。それなしにはこれからの明るい沖縄の未来と文化都市像は見えてこない気がする。（豊平 秀樹）

編集デスク

FM沖縄のポップンロールS.のDJは前々から気になっていた。最近、OTV、RBC、NHKの各TVともウチナー文化のトーク番組をスタートさせている。身体の内側からストレートにハジケに行く感じが気持ちいい。伊江さんのインタビューでも感じた事だが、ニュー世代のウチナー人が自らの文化に自信を持ち出して来た証と言える。ヤマトウージャーとウチナージャーがあるように、自分の顔に誇りと自信をもちたいものだ(上)。



日生ビル前の彫刻

絵画(油彩・水彩・版画)の専門店
art 画廊 沖縄
ART GALLERY OKINAWA
 〒900 沖縄県那覇市泉港2-2-3 ☎(098)324-5792